巻頭エッセイ

私の中の多分野交流

高山　博（西洋史学）

毎週木曜日に駒場のキャンパスに通い始めて12年が過ぎようとしている。かつて「ｘｘ（バツバツ）一般」と呼ばれていた「総合科目一般」の授業のためである。この12年間、毎週木曜日になると、4時過ぎに駒場キャンパスの非常勤講師控え室（かつては旧図書館横の資料館２階にあったが、今は保健センター隣の102号館１階にある）へ行き、配布資料のコピーをして、7号館へ向かう、そして、6時頃には授業を終えて、駒場東大前駅から帰路につくという生活を送ってきた。その前後には、同様に駒場で講義を持っておられる文学部の先生方とお会いする機会が多かったので、慌しくコピーをとる私を覚えておられる方もいらっしゃることだろう。

この木曜日の生活パターンと同じく、授業の形態も12年間ほとんど変わっていない。「国際政治・経済・社会の変容とメディア」と題するこの授業は、グローバル化する世界の理解を目指す、1、2年生それぞれ9名しか取らない演習形式の少人数講義である。学生をヨーロッパ、アメリカ、アジア・アフリカ担当の3地域にわけ、毎週、海外メディアの記事を分析・報告させる。夏には集中合宿を行い、朝から夜遅くまで数日間にわたって議論を続ける。年度末にはそれぞれが選択したテーマについて論文を書き論集を作る。ハードな授業だが、学生は愚痴一つこぼさず必死についてくる。半年に一回メンバーを見直し、何らかの事情で、こちらが期待するレベルに達することができない学生は辞めてもらい、新たに募集した学生をかわりに入れることにしている。だから、学生が必死になるのも当然かもしれないのだが・・・。

このような授業を開講したのには、理由がある。私は自分が駒場の学生だったときに、ほとんど勉強らしい勉強をしなかった。新しい知識や考え方を最も効率的に吸収できるその時期に、教師の適切な指導を受けて勉強していたら、今の自分よりずっと先へ進めていただろう。アメリカの大学院で学びながら、そのような思いを強くしていた私は、帰国して最初に赴任した一橋大学で、この授業を始めたのである。アメリカではエール大学の大学院で学んだが、そこでは、一定期間のうちに専門分野の大量の知識を習得することを要求されると同時に、その知識にもとづいて独自の考えを構築し、それを論理的かつ明確な形で発表することを要求された。そして、学部の学生は、より広範囲な分野で、同様なことを要求される。彼らは、過酷なカリキュラムに耐え、１～２年の後には見違えるようになっていく。私は、日本の学生にも同じような機会を与えたいと願っていた。

この授業に参加する学生たちは、大学へ入学してすぐに厳しい授業を始めることになる。

それは専門の授業ではない。彼らが一生使うことになる勉強の仕方や、情報収集・分析の仕方、歴史観、社会の見方を学ぶのである。最初はまったくと言ってよいほど現実社会に対する知識をもたず、自分の見解もない彼らが二年のあいだに見違えるように成長し、身につけた知識を使って、自分の考えを論理的に説明するようになっていく。すでに百名を超える卒業生を送り出したが、その多くが国内外の第一線で自分の目標を達成しつつある。それを見ると教育者としての醍醐味をしみじみ感じる。最初は、自分の理想と使命感から始めたのだが、その成長の過程を見るのが楽しくて、これまでこの授業を止めることができなかったのだと思う。

このゼミで学生が学ぶことは多岐にわたるのだが、どの分野であるにせよ、グローバル化がメイン・テーマとなる。グローバル化については、現在さまざまな議論がなされており、その是非を問う議論も多い。しかし、その良し悪しにかかわらず、この日本社会で生きていく限りは、グローバル化を避けて通ることはできない。学生一人一人に人生を生きていく術を教えるという立場からは、彼らにまず現実を直視し、自分が生きている世界のありのままを理解してもらわなくてはならない。グローバル化が逃れることのできない現象であるなら、それがもたらす影響をしっかり理解させ、その中で自分がやりたいことをどのように達成していくか、自分で考えさせることにしている。

ところで、この授業は、私の専門とは、ほとんど関係がない。本郷では、1993年から文化交流研究施設・基礎部門（現在は、次世代人文開発センター・国際先端部門）、2004年から現在まで西洋史に所属しているが、私の専門は西洋中世史である。学部の学生のためには西洋中世の主要な研究テーマを扱う演習、大学院生のためには西洋中世の君主国の統治システムの比較を行う演習を開講し、講義では、西洋中世史の概説とともに、私の研究テーマである中世シチリア王国、中世地中海の異文化接触・交流、中世地中海三大文化の比較、中世フランスの王権と諸侯についての話をしてきた。

二十年以上私の研究の中心を占め続けてきたのは中世シチリアである。中世シチリアが、アラブ・イスラーム文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、ラテン・ヨーロッパ文化圏のちょうど接点に位置し、それらの文化が接触・交流する場所だったからである。十二世紀に栄えたノルマン・シチリア王国では、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語が公用語として用いられ、それらの言語で書かれた文書が現在も残っている。この島は、西欧の歴史家たちにとっては、ヨーロッパの辺境にすぎなか

ったようだが、私にとっては三つの文化圏を比較し、三つの文化の接触・交流を研究できる絶好の場所だったのである。

しかし、近年、私の研究の中心は、シチリアを中心とした中世地中海の異文化接触・交流から、次第に、現在のグローバル化現象に重心を移してきた。イタリアのある作家は、言語・宗教・文化を異にする人々が日常的に接するようになってきた現代世界の状況を、「現代世界はシチリア化している」と表現したが、グローバル化する現代世界は、異文化接触が日常化し、異文化に属する人々の共存によって栄えた中世シチリアと多くの点で重なるのである。

他方、別の意味で、中世シチリアは、グローバル化する現在の世界を見るための理想的な場所のようにも思える。日本を理解するために外国を知る必要があるように、現在を理解するためには過去を知る必要がある。自分の位置を理解するには、異なる時代と地域を見て、それと比較する必要がある。グローバル化が進展し統合が進む現在を理解するには、単に日本の過去やイギリスの過去という一つの国の過去との比較だけでは十分でないだろう。複数の国や文化圏を含む過去との比較が必要となる。複数の文化が接触・交流する過去の世界と比較することによって、私たちは、現在の自分たちの位置や状況をより正確に認識することができるからである。中世シチリアは、そのような複数の文化圏を含む地中海の中心なのである。

しかし、このようにグローバル化が重要な研究テーマとなった最大の理由は、私の中で、「シチリア研究」と木曜5限の駒場の授業が「交流」した結果なのかもしれない。専門の研究では、中世シチリアの異文化交流から、西洋中世の比較史、地中海における複数の文化圏の交流、そして、現在のグローバル化現象にまで関心が広がってきた。他方、駒場の授業では、これからの世界で生きる術を教えるために、学生たちと、グローバル化が進む現代世界の分析とそれへの対応を議論する。二つの異なったものが同時進行し、交流した結果が、現在の私の関心を形づくったといえるかもしれないのである。私の歴史学者としての最終的な目標は、「グローバル・ヒストリー」と呼べるような人類の歴史の新しい枠組みを作りあげることである。それを達成するにはどれくらいの時間がかかるかわからないが、その過程で、駒場の学生との現代世界に関する議論がますます不可欠のものとなっていくことは間違いないと思う。

東京大学大学院人文社会系研究科『多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』51号（2006年2月22日）1-3頁。